

---

# 女神の守護者

瑯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

女神の守護者

### 【Nコード】

N7661B

### 【作者名】

瑯

### 【あらすじ】

神々の中で最も美しく清らかである女神アリア、大地の女神ルーヤの呪いにより千年に一度はすべての力を失い、100日間の間ただの人間になってしまう。それは魔族たちがアリアの力を奪い、吸収する大きなチャンスとなる。アリアはそのつど、天空の城に結界を張り、ほかの神々の力を借りて、7000年もの月日を安全に過ごしてきました。しかし、八回目の危機のとき、偶然により女神は人間界に落ちてしまう…

## 第一章（1）

### 第一章（1）

クロスが6歳の時。ある日、父は彼を抱いて皇室の神式典を見に行きます。式典の中で1人のハンサムで金髪の男子を指し、小さいクロスに対して言いました。

「クロス、あの方を見えますか？あれはサルモンドゥバック將軍だ、彼は帝国の誇りです！私達の国の最も強い男！」

その時、6歳のクロスにとって、なにが最も強い男なのか、まだわかりませんでした。ただ彼は父の表情と目の中から言い表せないほどの崇敬が漏れていることが見えました。

クロスは小さいときから父を崇拜していました。父が勇敢で強い男だったためです。自分の父が崇敬する人、それならきっと自分も崇拜すべきだ！と彼の小さい心の中で思いました。

3年後に、クロス父はバック・サルモンド將軍につき出陣しました。

隣国の侵入を防ぎ止めて、不幸にも父は戦死。しかしこの国家防衛戦争、バック將軍のすばらしい指揮のため全勝します！

その日、帝国の軍隊は勝利とともに帰えってきました！帝都の民衆はすべて熱烈な歓迎をおこない、生花と拍手の音を使って、彼らがみんなの期待に負けないことを祝賀し、国家と人民のために血と汗を流した戦士たちを賛美しました。

空前の盛況の中、バック將軍は隊列での最も前に立ち、金甲の白馬にのり、まるで太陽のごとく光り輝いていました。帝国の皇帝ゼウル6世は自ら皇宮から彼の勇士達を歓迎し、彼らの帰還を喜びました！

その日、小さいクロスと母は屋根裏部屋の窓に立って、この盛況を目の当たりしました。母のソーザンは涙がほろほろと流れて、クロスの頭をなでて、言いました

「クロス、あなたの父は本当の勇士でした、彼は戦場の上で死に、国家を護るため、私達を護るため、彼は貴重な生命を捧げました！クロス、あなたに泣くは許されません！あなたは男です！あなたはあなたの父を誇りと感じるべきなのです！」

クロスは涙を拭いて、過ぎ去っていくバツク將軍を見ました。彼は話をしませんでした、ただ小さい心の中で、すでに死んだ父のように勇敢な男なると決心します。

この年、クロスは9歳でした。

## 第一章（2）

また3年を過ぎました、クロスはついに何が最も強い男か分かりました。

その日、帝都の上空に伝説の中のレッドドラゴンが飛んで来ました、城の中で飛び回り貴族や人々の家に対して気が狂っているごとく攻撃を行いました。家々は巨大な竜の口の中の噴き出す激しい炎により、一瞬で火の海と化した。

城の中の民衆の多くはこのような伝説の中の生物を見たこともなく、ただ自分が巨大な竜の襲撃を受けることをひどく恐れ、あちこちに逃げ回るばかりです。帝都の都市防衛軍は迅速に現場まで急ぎ、強弓で巨大な竜に挑みます。しかし、どんなに羽箭を発射しても、巨大な竜はただ空中で方向を変え、兵士に向けて口を開き、1本の激しい炎を噴き出して襲うだけです。竜の炎は一瞬で、発射する羽箭と兵士たちは影も形もなくなるぐらいと化しました。

この時のクロスは、お姉さんのルーズに連れられて家に向かって走っていた。クロスは走りながら、後ろの恐ろしい生物に見向きません。それらは空中でぐるぐる回って飛び舞って、昂然とした叫びを出します。

しかしクロスは突然城の中から飛びだす一筋の金甲の人影が見えましたが、稲妻のごとく、ドラゴンに飛びかかります。

クロスだけではなく、城の中で無数の民衆もすべて、この世に比類のない人と竜の戦い見ました！それは全身を金の甲で覆い、誰もががしる帝国の将軍、神祐騎士のサルモンド・バック。

クロスは姉の手を振りほどいて、呆然とし街頭に立った、バック將軍の剣はドラゴンの巨大な腹に差し込み、その右翼を捉えて、右の腕の盾ではその頭を殴った。口の中で二回も烈火を噴き出すとするが、その度に盾によって殴られ、竜血を吹きだし、地面に落ちていきました。

クロスはこの時やっと理解した、一人の力はここまで強くなれるということ。

彼の心の中は更にバツク將軍を崇拜した、この世にはもういない、彼の父のように勇敢な人になるだけではなく、その上バツク將軍のように強大な人になる！と心の中で誓って。

しかし運命は小さいクросを嘲笑うようだった。クロスの母はクロスを生むとき、1ヶ月以上も予定日より早く生んでしまったのです。それによるのか、クロスは体が弱く病気がちでした。1年の365日、彼は少なくとも100数日は、病床の上で過ごしたのです。こんなに虚弱な体で強者になりたいなど、ただの戯言のようでした。時間はすぎていき、クロスは15歳になりました。母の長期の看病を経て、クロス体はある程度好転し、病気にもなりにくくなりました。この年、彼は母に剣士になるため武術を習いたいと申し出ました！

## 第一章(3)

クロス全名はクロス・フロンクスと言って、祖先はかつて帝国の貴族でした。しかし、時代の変動で、とつくに没落しました。父のルーク・フロンクスは、以前は帝都の都市防衛軍の下級の将校の一人でした。クロスの生活するこの世界はサリアードの大陸といえます。クロスの生まれた国、パンス帝国は2百7年前建国し、サリアード大陸の南端の1つの中等の帝国でした。大陸上で数少ない、神聖かつ純潔な女神のアリーアを信奉している国です。

クロスにはルイズ・フロンクスという姉がひとりいて、クロスより3歳年上です、姉弟2人と母のスーザンと助け合いながら生きていました。家には下等の貴族の肩書きがありますが、実状では彼らは平民の生活をしていました。母のスーザンは頭の回転が速く、手も器用で、ふだん町内の隣人に服の綿入れの掛け布団を縫って、生活費を補助するように手伝っています。お姉さんのルイズは城の中で1家の果物屋は店員になって、毎月、3枚の銀貨を稼ぐことができます。

クロスの武術を習いたいという要求に、母のスーザンをとても困りました。帝国で成功したいと思うなら、2つの道をしかありません。1つめは剣士になり、国家に忠誠を誓うこと。もうひとつは魔法を修行し、魔法使いになった後に、神聖教会に入ることです。ただ、剣士あるいは魔法師になるのは、一般的平民にとって無理だったのです。なぜなら、これらは金持ちや貴族たちの特権だったからです。平民の子は一般の学校へ行き、字を読めることと生活の技能しか勉強できません。

クロスのはいちよう貴族の肩書をもっています。しかし帝国の最も低クラスの魔武アカデミーでも1年の授業料は少なくとも10

個の金貨が必要です。年収を1個の金貨とするフロンクス家にとって、これは明らかに天文学的な数字です。

しかし息子の理想のために、スーザンは依然として応答しました。ただ、現在でない！

彼女は正直に親父の死後、帝国から三つの金貨を慰謝金にとし  
て与えられたことをクロスに教えました。

「もともとこれはあなたに残しておいて、将来女房をめぐつたためのお金だったのです。ただ、あなたは剣士なろうと希望する以上、あなたの母親として、あなたに全力をささげて応援するわ。」

彼女はクロスの18歳以前に授業料をなんとかして集め、魔武アカデミーに入れることを約束しました。

クロスはとてもやさしく、言うことをよく聞くいい子でした。

彼は自分の母親をこまらせませんでした。その年、彼は普通の中等学校に入り勉強することにしました。1年の授業料はたったの5個の銀貨です。だが、クロスの剣士になり、強者になる夢は一回も緩んだことはありません。彼は勉強にとっても励みして、成績優秀でした。晩になると、彼は布屋に行き、布の色染めのアルバイトをし、自分のための授業料の金を集めました。

## 第一章（４）

クロス之母と姉は彼の理想ため、夜と朝の区別がつかないほど仕事をしました。スーザンは更に多くの裁縫の仕事をするだけではなく、その上金持ちの家に入って使用人になり、洗濯や床磨きなどのことも手伝いました。ルイーズは昼間果物屋で働くだけではなく、晩までも、バーのヘウエートレスの仕事もつけました。毎日、夜明け方まですべて働きやっとなれる家に帰ってくる事ができました。

自分のために苦勞に苦勞する身内達を見て、クロスは心の中非常に感動しました。彼はひそかに誓いを立て、どのくらいの困難に関わらず、きつと成功する！きつと母とお姉さんに恩を返す！剣士になつたら、彼女たちを幸せでのんびりしている生活を過ごさせてみせる！

春はいき秋がきた、花が咲いて、また落ちた、またたく間に三年向がすぎさつた。クロスはすでに18歳の少年です。もうすぐで彼は中等学院から卒業します。

この日、学校がおわり、柯は慌ただしく片付けをし、家に早く帰れるよう準備をしました。晩、彼はまだ仕事があつたのです。その時、彼の先生のロープが、彼を呼び止めました。

「クロス、ちよつと待つてくれ。話しがしたい。」

クロスは年寄りじみているロープを見て、うなずいて言った：

“はい、先生！”

ロープ先生の部屋につくと、彼はクロスに腰を下せと合図し、自分はクロスの前にすわつた。

彼は優しいまなざしでクロスを見ました。クロスはしばらく待つた

が、先生がずっと黙ってただ自分を見るのを不思議に思った

「先生、突然私を呼んで、どうしたんですか？」

ロープ先生は1回咳をして、ゆっくりと言った

「クロス、きみは私の教師として生活してきた40年来で、出会った最もすばらしい生徒だ。私はとてもうれしいよ。私もそろそろ年だ。今年、定年退職して家に帰らなければならぬのだよ。しかし、いまだに私の後任が見つからない。私はきみの家庭があまり裕福ではないことは知っている。きみが卒業した後に、私から院長にきみを学校に残して、教員として務めるように推薦したい、私の職務をつがないか？」

クロスはそれを聞いてぼうつとした

「先生、あなたは今年……もうすぐ定年退職するんですか？」

ロープはでで真つ白なひげをなでて、息を吐いた

「そうだ。人は年には逆らえぬのだな！クロス、私は60数歳になつて、ここ数年、病気がちになって、恐らくもう働けなだらう。帝国で、平民は高等のアカデミーには入れないのだよ。きみ達みたいの学生の多くは、卒業後、各自の技能証明書を持って仕事を探すしかない。きみのように優秀な人材でも、せいぜい同じく一家を支えるぐらいのことしかできないだらう。だから、そのようにするよりも、まだこのまま残つて先生になるほうがいい。もちろん、1名の若い教師として、給料はそんなに高くないだらう、私は毎月大体の7つの銀貨の給料としてもらえる。きみも知っているだと思つが、教師は高尚な職業で、とても人に尊敬さる。あなたは私の最も優秀な学生で、私は非常にきみが私の栄光を受け継いでくれることを望んでいる。より多くの良い人材を私の変わりに育ててほしい。どうだ？きみはどう思う？」

クロスの心の中はたちまち温いものを感じました、彼は7枚の銀貨が平民にとつてとても高い給料だと知っていました。ロープ先

生の体が自分の言うように悪くないことも。そして、彼が退位して自分に譲るのは、本当は自分が卒業をしたあと、また苦労して、卑しい仕事を探さなければならぬことを見たくないからということも。この先生からの暖かい言葉は、クロスをとっても感動させた。

しかしクロスの夢はここにはなかった！

彼は心からロープ先生に対し言った

「先生、本当にあなたに感謝します！私はあなたの考えも知ってます。しかし、本当に申し訳ないですが、私はあなたの言葉を承諾することができません。私もこんな平凡の一生を過ぎることをいやです。先生、私の願いは一人の剣士になることです、私は高等学校に入って、修行します！！」

## 第二章（1）（前書き）

ここから物語本当に始まります^^

## 第二章（１）

それを聞いたロープ先生はぎょっとし、びっくりしたように言った。

「きみは高等学院に入りたいのですか？しかし、そこは貴族、あるいは金持ちしか入ることができないはずでは？帝国で最も低クラスの高等学院の１年の授業料は少なくとも１０の金貨。しかも、もし貴族でないならば、更に百の金貨を必要なのですよ。どれくらいの大金か分かっているはず！クロス、平民が一生をかけても、この授業料を集めることができないのですよ。まして、金があるとしても、あなたはこれまで剣術の指導を受けたことがなく、きみが高等学院に入った後に、修行の進度に追いつけるかどうかも…あなたの同級生達はみんな中等アカデミーから出てきているのです。みんな基礎を習っていて、剣術はすでに円熟の域にあるのですよ。特に成績がよい人はすでに斗気を扱えるかも知れないというのに…きみみたいの新米が、どうやってそんな学園でやっていくつもりですか？」

クロスは微笑んだ

「先生、将来は努力で決まります！私の祖先はかつて下等の貴族でした。私の全家族はこの授業料のためにどれくらい努力したか…もし私がここであきらめたら、私の全家族の一生懸命やってきた仕事はただの無駄になってしまっじゃありませんか！？だから、先生。私はきつとやり通すことができます！私はこの世に不可能はないことを信じています。私自身けっしてあきらめなければ、きつと理想はいつか実現することができます！」

「そうですか。」ロープは先生はため息をついた。

「もしきみが本当にそうしたいのなら、私も何も言うことはありません。クロス、私はきみが何もかも耐え抜くような強い心があることを知っています。私はきみならきつと成功する日が来る、と信じてるよ。きみが私の提案を受け入れなかったことは非常に残念に思

うが、先生はあなたを祝福します。きみにアリアの祝福があらんことを。」

クロスはいすから立ち、ロープ先生に深くお辞儀をし、彼の謝意と敬意をあらわしました

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

学園から出たとき、すでに太陽は沈んでいた。ちょうど校門を出て行き、入り口の遠くないところで、クロスは、いかにも傲慢そうな態度で立っている3人の人が見えました。2は男性で、一人は女性。年齢はすべてクロスとたいして違わないで、体には制服を身につけています。その制服をクロスは知っていました。ここから遠くない聖ルース中等アカデミーの制服です。

聖ルース中等アカデミーは帝国の最も良い中等学院で、上級な貴族、あるいは特別な金持ちの子供しか入れません。この3人の中とくに少女は非常に目立って、真っ赤なロングヘア、エメラルド色で澄んだ目、スタイルは抜群で、その魅力は輝かしいとだけでは表現できないぐらいです。その胸のふくらみはますます着ている制服を突き破りそうです。

ちょうど思春期で、血気が多いクロスは思わず彼女に見取られてしまいました。しかしアカデミーの生徒は、すべて帝国の上級者の子ども。クロスは厄介事を引き起こすようなことはしたくないので、彼らから遠回りして通ろうと思いました。

ちょうど歩きだしたとき、突然いかにも遠慮なしのような女の声が耳聞こえてきました。

「そのあんだ、ちよつと止まりなさい。」

## 第二章(2)

とつくの前に授業がおわった学院です。学校の入り口では3人の聖ルーズ中等アカデミーの学生を除いて、クロス1人しかいません。

この声は、もちろんクロスに向って飛んできたのです！

クロスはしかたなく、足どりをとめ、落ち着いて向きを変えました。やはりあの赤毛の少女は指で自分を指し、高慢な口ぶりで見ました。

「あんた！ちよつときなさい！」

クロスこの少女の態度が嫌いでした、しかし、帝国で、貴族が平民に対する態度はずっとこのようだったのです。彼も貴族ですが、祖父代から大衆化していました。だから、彼は憤慨を感じませんでした、ただ、自分とこの少女は知り合いでない上、会ったこともない。なぜじぶんをよんだのか？まさか…さっき自分が彼女を見つめてしまったから…

クロスは小さいときから冷静な子でした。だから、例え彼の心の中では不愉快ではありましたが、やはり顔色ひとつ変えず前へ3歩を歩みでて、少女から5歩離れたところで止まりました。儀礼として、平民と貴族の話をする時、必ず先にお辞儀をしなければなりません。しかし、クロスはそれをせず、ただ落ち着いて言った

「いかがでしたか？」

紅発の少女の右側の白髪の少年はすぐに怒鳴りました

「どついう口づかいしてるんだ！この卑しい平民め！貴族と話をする前に、必ずお辞儀をしなければならぬことをしらないのか。」

少女の左側にいる、暗い髪の毛をした少年も軽蔑するような眼差しをこつちに向けました。

「こちらのお方は帝国の重臣ブラン伯爵の娘で、気高い女性魔法使いのアーニーさんだ。あんたみたいな平民は、ひざまずいてしゃべろ

「！」

クロスも貴族です。彼はお辞儀をしない権利がありました。ただここのような状況だと、彼としても釈明することができません。わざと聞こえないふりをして、ただ少女だけを見て、彼女が話すのを待ちます。

白髪の少年はクロスが依然としてお辞儀をしていないことをみて、思わずむっとして顔色を変えて怒った。左手は空中で記号を描き、魔法を使つて、無礼な平民を懲らしめようと思いました。

しかし、このとき赤毛の少女が手を伸ばして止めました、クロスを軽蔑な眼差しで見つめて、白髪の少年にいった。

「エル、こんな儀礼なしの田舎者を懲らしめるなんてやめなさい、自分の身分を辱めるわよ。私達は大切な用事があるのよ、この平民と時間を無駄にすることないわ。」

その白髪の少年がまだ怒っているのをみて、そばの暗い髪の毛の少年すぐ言いました

「そうだ！卑しい汚らしい犬になにか教えてもなんの意味がある？ 魔導書を見つけないと学院に帰れないぞ。ここでぐずぐずする時間はない！」

少女もそれに賛成し、クロスのほうに言った

「あんた、ここの花屋の息子のクリスつてやつ知らない??」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7661b/>

---

女神の守護者

2010年11月23日02時08分発行